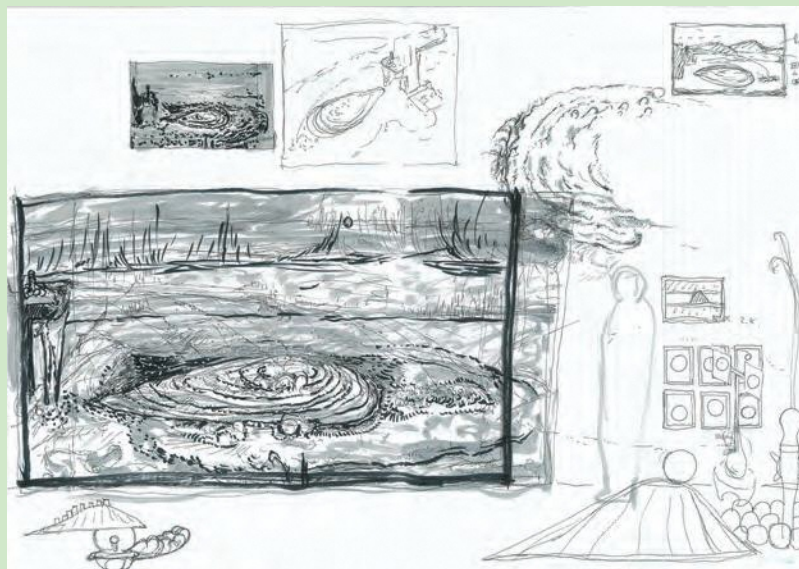


# THE GALLERY

- もくじ ■企画展 | 「堀内誠一展 FASHION・FANTASY・FUTURE」「20世紀北欧デザインの巨匠 スティグ・リンドベリ展」  
■特集 | 「ニューアートシーン・イン・いわき」のはじめ方～渡邊洵の場合～ ■常設展示室から ■学芸員ノート | 「イチオシ企画」を終えて



上 堀内誠一『ぐるんぱのようちえん』(1965年)福音館書店 ©Seiichi Horiuchi  
左下 スティグ・リンドベリ[スプリングレ]シリーズ/大きな馬 1958年  
リンドベリ家コレクション © Stig Lindberg Photo: Per Myrehed  
右下 渡邊洵 新作へ向けたエスキース

## 企画展 | 堀内誠一展 FASHION・FANTASY・FUTURE

4月18日(土)~6月7日(日)

堀内誠一(1932-1987)は、絵本作家、デザイナー、アートディレクター、著述家などいくつもの顔を持ち、それぞれの分野で卓越した仕事をしたアーティストです。絵本作家としては、子どもたちに愛されている『ぐるんぱのようちえん』をはじめ70冊以上をてがけ、物語内容に合わせて多様なスタイルで描きました。

デザイナーとしては『anan』、『BRUTUS』、『POPEYE』のタイトルロゴを創作したほか、雑誌や本、広告など多様な分野で印象的な仕事を数多く残しました。またアートディレクターとしては、1970年に創刊された『anan』で、立ち上げから2年ほど中心的な役割を果たし、それまでの日本にはなかった、おしゃれでわくわくするビジュアル・ファッションマガジンを創り上げ、多くの人に影響を与えるなど、いくつもの雑誌で活躍しました。

今回の展覧会では、『anan』の誌面を通してデザインワーク



左 『anan』表紙(4号、1970年) 右 『anan』中面(45号、1972年)  
平凡出版 ©マガジンハウス ©Seiichi Horiuchi

やそのアートディレクションをひも解く「FASHION」の章、ファンタジー色の強い絵本の原画を展示する「FANTASY」の章、そして100人以上のクリエイターや編集者などが堀内の魅力を伝え、その仕事を未来につなげようとする「FUTURE」の章による三部構成で、堀内誠一の多彩な仕事を紹介します。

## 企画展 | 20世紀北欧デザインの巨匠 スティグ・リンドベリ展 6月27日(土)~8月23日(日)



[ベルサ]装飾、[LL]モデル/ディナーセット 1957年/  
モデル、1960年/装飾 リンドベリ家コレクション  
© Stig Lindberg Photo: Per Myrehed

スティグ・リンドベリ(1916-1982)は、スウェーデンの陶芸家・デザイナーです。1937年にスウェーデンのグスタフスベリ磁器工房に入社し、鮮やかな葉っぱの模様がさわやかな[ベルサ]シリーズなど、世界中に知られる名作プロダクトを手がけました。機能性とは何か、調和や美とは何かを追求し、独創的なアイデアをもとに新たな表現方法へと挑戦し続けた彼のデザインは、現在もなお高く評価され、没後40年以上を経た今も多くの人々に親しまれています。

本展では、日本でも人気のある食器や皿などのテーブルウェアに加えて、ファイアンス(錫釉陶器)や一点もののアートピース、テキスタイル、絵本の挿絵、日本との関わりを示す作品など、初期から晩年までの作品を展示します。モダンな北欧デザインに関心が集まる現在、20世紀デザインのパイオニアとして活躍した偉大なアーティストの一人としてスティグ・リンドベリを再発見し、日本ではこれまでに紹介される機会のなかった側面をも含めて、その芸術性を紹介します。

## 特集 | 「ニューアートシーン・イン・いわき」のはじめ方～渡邊洵の場合～



図1 《あの日の記憶から》2017年 映像



図2 《EUREKA》2020年 映像

1991年から行われている「ニューアートシーン・イン・いわき」は、独自の表現を行っている現代作家を紹介する展覧会シリーズです。年に1回程度、美術館1階ロビーを会場として開催しています。小規模な展示ながら、各作家が美術館という場に合わせて実験的な作品を作るなど、戦後美術と地域の美術をコレクションの柱とする当館らしい企画といえます。これまで50人と1組の作家を紹介してきた本企画の52回目となる今年、いわき市出身の渡邊洵<sup>わたなべまこと</sup>を取り上げます。1994年生まれの渡邊は、多摩美術大学を卒業後、映像を主としながら、パフォーマンス、ドローイング、刺繍、文筆活動など、さまざまな手法を横断的に用いて表現活動を行っている作家です。身体にまつわる表現に強い関心を持ち、各地を旅しながら自ら刺繍を施した衣装をまとうて踊る様子を記録した映像作品などを制作しています。

さて、今回渡邊をご紹介しますにあたっては、筆者が下調べと個展の調査を行ったうえで館内で検討し、展示を打診する運びとなりました。ここで、筆者が渡邊の個展に行った時のこととお話ししましょう。なぜ当館で彼の作品を展示するのか、という基本的な問いの答えの輪郭が見えてくるのではないかと思います。

最初に渡邊の作品を観たのは、2025年8月に東京のギャラリーで開催されていた個展「原発と呼吸」でした。渡邊の映像作品の中から原発に関わる作品を抜き出した企画で、中にはいわきでの出来事を題材とする作品もありました。《あの日の記憶から》(2017年、図1)と題されたその作品は、東日

本大震災の記憶をもとに制作されています。当時高校2年生だった渡邊は、地元であるいわき市勿来町で震災に遭いました。当時のいわきは、地震によって電気、水道、ガスなどのライフラインの一部、地域によっては全てが止まっていました。渡邊の家でもガスと電気が止まり、飼っていた金魚の水槽に酸素を送るポンプが停止、酸欠になった金魚が水槽に浮かんできたといいます。渡邊とその家族は、瀕死の金魚を助けるために、一晩中ストローを吹いて金魚を入れたバケツに酸素を送り続けました。その夜の出来事から発案した映像作品が本作です。作中では、渡邊が金魚の入ったバケツの中に息を吹き込む映像の合間に、海岸で波にのまれながらストローを吹こうとする渡邊の映像や、どこか原発建屋を思わせる砂で作ったかたまりが波に浸食される映像が挿入されます。東日本大震災以降、福島第一原子力発電所の事故の状況が報道されるに従って、いわきを含む福島の名は、さまざまな意味を帯びていくようになりました。しかし、地震発生当初は、沿岸部の津波被害も、原発の事故も、詳細が不明なまま、住民は突然止まったライフライン、物流が途絶え手に入らない生活物資など、身近な問題の解決、自らの生活の混乱への対応で精一杯でした。本作は、生活と地続きの記憶の一部として震災があった当時の実感をよく表現しており、震災発生時に高校生としていわきに住んでいた作家ならではの作品ではないでしょうか。告発的に震災を扱った作家たちにはない、震災が日常となった世代や地域の手触りを感じさせる表現として、渡邊の作品はあるように感じられます。筆者が渡邊の作品をいわき



---

### 渡邊洵プロフィール

1994年 福島県いわき市生まれ  
2019年 多摩美術大学絵画学科油画  
専攻卒業  
2019年 福沢一郎賞受賞  
2020年 「リュウの首を補完する」/個展  
/東京/四谷未確認スタジオ  
2024年 「苔男」/個展/東京/  
ArtCenterOngoing  
2025年 「原発と呼吸」/個展/東京/  
TAVGALLERY  
ほか、個展・グループ展多数

---

左 図3 新作へ向けた調査の様子

右 図4 新作へ向けたエスキース

で展示したいと思い、推薦した背景には、本作の存在が大きく関わっています。

そもそも渡邊は、本人の身体の実感以上のことを表現しえない作家です。渡邊の作品《EUREKA》(2020年、図2)は、全身を金色に塗った作家本人が、いわき市常磐湯本町のいわき市石炭・化石館から東京都台東区の国立科学博物館までの道のりを「EUREKA」とつぶやきながら歩く様子を360度カメラで記録したものです。両者には、フタバズキリュウといういわきで発見されたクビナガリュウの全身復元骨格が展示されているという共通点があることから発着点に選ばれました。本作の中で渡邊は、生まれ育ったいわきを「体」でありエネルギーを生産するもの、現在暮らしている東京を「頭」でありエネルギーを消費するものにとらえます。渡邊はいわきと東京の間に感じる差異を、歩いてつなげるために旅をします。約200kmを徒歩でゆくという過酷な道程で追い込まれた果てに、彼の身体は本人の意志とは関係ないところで、踊るようにもがきながら前に進むようになります。その旅によって渡邊は独自の踊りを発見し、踊り始めるのです。

今回、「ニューアートシーン・イン・いわき」の展示を打診するにあたり、筆者から作家に依頼したことがありました。いわきと関わりの深い前述の2作を展示に含めて欲しいということです。はじめ渡邊は、それらを中心に既存の作品で会場を構成することを考えていたようでした。しかし、ある日の打合せで、本人から、美術館での初めての個展となるので、守りに入らず挑戦したい、いわきという場所に改めて向き合い、

《EUREKA》の続きとなる新作を作りたいとの申し出があり、新作を中心にすえて展示を構成するプランに変更となったのです。

いま渡邊は、本展出品作の制作のためにいわきと東京を往復する生活を送っています(図3)。たまに当館に立ち寄って制作の様子を教えてくれるのですが、渡邊の作品の背景には、膨大な事前学習と調査があります。大量の機材とともに自転車で市内各地や浜通りをめぐるっては、資料を読み、記録をとり、時には野宿をし、いわきという土地が持つ身体を探すために身を削る旅を続けているのです(図4)。炭鉱や原発、念仏踊りや吉野せい。彼は、旅の途中で見つけた必然性を一つ一つ集めては、撮影本番の踊りに向けて準備運動をしているのかもしれない。「炭鉱のズリ山を取り付けた灯籠をまとめて踊りたいんです」と渡邊は言います。筆者の目には、まだ、それがいかなる作品となるのか、その全貌は立ち現れていません。しかし、誰よりも作品の完成を楽しみにしている担当学芸員として皆さんにお約束できることは、今年の「ニューアートシーン・イン・いわき」も絶対におもしろいということです。開幕まであと半年、ぜひご期待ください。

(学芸員 猪狩智子)

---

「ニューアートシーン・イン・いわき 渡邊洵」

会期:9月12日(土)~11月1日(日)

会場:いわき市立美術館1階ロビー

## 常設展示室から

常設展の前期では、「美術館へようこそー現代アートを形づくるものー」というタイトルで、現代アートを語るうえで欠かせない「素材」に焦点を当て、当館の収蔵品の中から素材の特性や魅力が伝わる良質な作品を紹介します。

私たちは日々の生活の中で、木や紙、金属、石、プラスチックなど、さまざまな素材に囲まれています。これらの素材は生活を便利に豊かにしてくれるだけでなく、現代アートの世界でも重要な役割を果たしています。作家たちは素材の持つ特徴に目を向け、それを表現へと結びつけています。一方で、「素材」と聞くと、「絵画は水彩絵具」「彫刻は石や木」といった一般的なイメージを持つかもしれません。しかし、現代アートの世界では、素材の使い方や選び方が常識を超え、作家の専門性や独自の視点が存分に活かされています。

絵画ではやはり「絵具」が主役と言えるかもしれません。しかし、「絵具」といってもその種類は多様です。油絵具、岩絵具、水彩絵具、アクリル絵具など、それぞれ特徴が異なるため、作家は意図する表現によって使い分けています。その中で油絵具は、重厚な質感で大きな存在感を持ち、色の深みや独特の表面の仕上がりが特徴的で、作家の技術によって豊かな表現が可能です。ここでは、油絵具を使った特徴的な作品として、カレル・アペル《黄色い帽子》(1964年)を紹介します。

彫刻では、石やブロンズは古くから彫刻材料として使用されてきましたが、現代アートではアルミ、鉛、段ボールといった素材が大胆な形状や質感を通じ、新たな可能性を見せています。また、異なる素材同士を組み合わせた作品も見られます。例えば、本展で紹介する土谷武《向かい風》(1980年)は、鉄と木材を組み合わせ制作された作品であり、硬い素材である鉄の質感と木の柔らかな地肌を活かしながら、風という目に見えない空気の流れを巧みに表現しています。

この他にも、本展では素材をテーマに、特徴的な現代アートの作品を紹介します。作品と素材の関係に注目しながら、ぜひ鑑賞してください。

(学芸課長 江尻英貴)



土谷武《向かい風》1980年 軟鋼、コルテン鋼、木(チーク) 235.0×225.0×89.5cm

## 学芸員ノート | 「イチオシ企画」を終えて

「コレクションの輝き」展(2025.11/15~12/14)の会期中、来場者が展示作品の中からイチオシの1点を投票するイチオシ企画を行った。893票の投票があったが、これは観覧者1275人のうち約70%の人が投票したことになる。これほど多くの方がこの企画に参加してくれるとは思っていなかったが、さらに驚かされたのは、ほとんどの方がその作品を選んだ理由を書いていたことであり、しかも熱心に書かれた方が多かったのである。選んだ理由が書いてあるものは、監視スタッフが2階正面ロビーおよび吹抜け脇の壁面に作品ごとに掲示した。票数が多い場合、帯グラフのように下方に伸び、一列で足りない場合は複数列となった。

投票用紙を掲示したのは、他人が書いたイチオシ理由を読んだ後に、会場に戻ってその作品を見てみたり、自分が選んだ作品を別の理由で気に入っている人がいることを知ったりするのが、おもしろいのではないかと考えたからである。

この企画は人気投票が目的ではなく、来場者の方が展示作品を比較しながら1点を選ぶという行為を通じて、作品を主体的に、能動的に鑑賞することにつながるかと考え、そのための仕掛けとして用意したものである。

現代美術のコレクションは難しいと敬遠されがちなどころがあるが、少しでも親しみやすくするため、本展においては各作品に鑑賞の手引きとなるように、96字のコメントを作品脇に掲示した。字数を制限し、専門用語はなるべく使わず、目の前の作品を見て言えることを中心に書き、現代美術や美術鑑賞に慣れていない人でも読みやすいように努めたつもりである。一方、このようなテキストがあると、鑑賞の仕方が受け身になったり、あるいはテキストは読むけれど作品自体はあまり見なかったりする方を会場で見かけるが、イチオシ企画でそういうことを防ぎたかった経緯もある。

すべての作品に投票があったが、4票以上獲得した作品は63点で、全体の78%にあたる。投票が一部の作品に偏らず、まんべんなく作品が選ばれたという印象を受けたが、それは現代美術のバラエティの豊かさとともに一人ひとりの好みの多様性をうかがわせた。ちなみにベスト10は次のとおり。

作家名	作品名	票数
山野辺日出男	壁(蝕)	68
アンソニー・グリーン	パッション II	64
若松光一郎	ズリ山雪景	36
イヴ・クライン	人体測定 ANT66	36
斎藤清	霊峰(17)-秋・A	34
山野辺英明	Through the Clouds	34
松田松雄	風景(民-A)	33
トム・ウェッセルマン	マティスのあるモニカのヌード	31
若松光一郎	五月のヤマ	30
松田松雄	風景(堤)	25

この中の、山野辺日出男の作品は近年の収蔵で、これまで常設展で1回ぐらいしか展示していない。山野辺英明の作品は作家蔵の特別出品で、当館では初めて展示した。ふたりとも有名ではなく、作品本位で選ばれたということが分かる。それは他の作品についてもいえることが、各作品が選ばれた理由を読んでいくと分かる。

アンケートの結果などからは、「投票があったのでいつもより集中して鑑賞できて良かった」、「イチオシを選ぶという鑑賞のしかたが、とても楽しかったです。他の方のコメントも興味深かった」などの感想が寄せられ、おおむねイチオシ企画は好評であったようだ。今後、展覧会を見るときに、イチオシ企画をやっていないくても、作品を比較しながらどの1点が良いか選ぶ姿勢で鑑賞するのは、展覧会を楽しむひとつの有効な方法となるのではないだろうか。(主任専門学芸員 杉浦友治)

## 今後の主な展覧会のご案内

### 企画展

堀内誠一展 FASHION・FANTASY・FUTURE

令和8年4月18日(土)~6月7日(日)

20世紀北欧デザインの巨匠 スティグ・リンドベリ展

令和8年6月27日(土)~8月23日(日)

### 常設展前期

美術館へようこそ-現代アートを形づくるもの-

令和8年4月21日(火)~9月27日(日)

前期Ⅰ 新収蔵作品を中心に

令和8年4月21日(火)~7月20日(月・祝)

前期Ⅱ 美術の中の生き物たち

令和8年7月22日(水)~9月27日(日)